

だい ほう づつみ
大法堤

とうはくくんとうはく
(鳥取県東伯郡東伯町)



かいごん 開墾へのみち

森藤^{もりとう}部落は、明治^{めいじ}の初^{はじ}めには戸数36戸、人口180人、総面積^{そうめんせき}は150町歩^{ちょうぶ}（ヘクタール）^{あま}余りでした。そのうえこの地域は山ぎわのため、水田はわずかに総面積の10分の1ほどしかありませんでした。まわりの部落の水田^{くら}に比^{くら}べて、3分の2と大^{たい}変^{へん}少ない^{じょうきょう}状況^{じょうきょう}でした。

当時の村人のほとんどは、地主から土地を借^かりて作物をつくり、生活をまかなっていました。水田の少ない森藤村は生活が苦しく、地主も村人も、もっと水田がほしいと願^{ねが}っていました。

1852（嘉永^{かえい}6）年ペリーが浦賀^{うらがらい}に来航^{こう}した年、八橋郡^{やばせぐん}森藤村^{げんざい}（現在の東伯町^{とうはくちょう}森藤）の農家の長男として生まれた山下慶次郎^{やましたけいじ}は、このような村の様子をつぶさに見ながら育ちました。



ばんねん やましたけいじろう
↑ 晩年の山下慶次郎

1874（明治7）年、森藤村の区長になった慶次郎はこのような地域の姿を見て、何とかして田畑を広げ、村人の暮らしをもっと楽にさせたいと考えました。そこで慶次郎は、荒れ地^あの開拓^{かいたく}を始めました。用水^{ひつよう}を必要^{ひつよう}としない畑の面積を広げることから取

り組み、40^{さい}歳のころには32町歩（ヘクタール）を開墾^{かいこん}しました。慶次郎はさらに、この畑を水田^かに変える計画を立てました。それが、山条^{やまじょう}と呼ばれる小高い丘陵地帯^{きゅうりょうちたい}の新田開発^{しんでんかいぱつ}でした。



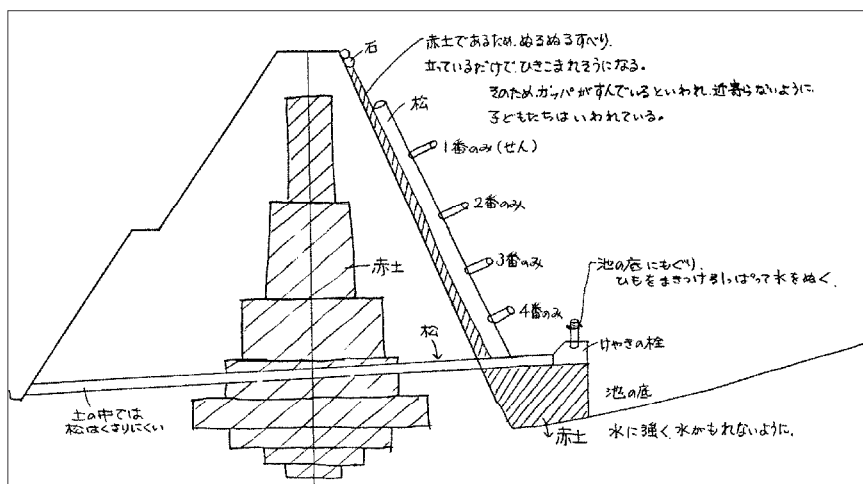
↑ ^{やまじょう}山条と^{ごうちせいり}呼ばれた耕地整理の計画図



↑ ^{なかいわい}工事中祝記念 (1907 (明治40) 年10月)

ため池をつくる

新田をつくるには、水が必要でした。慶次郎は、水源を求めて長い年月にわたって山野を歩き回りました。水源は見つかりましたが、一度に大量の水を確保できる状況ではなかったため、一時的に水をためることが出来る「ため池」をつくる必要がありました。



↑ 大法堤の設計図を復元した図



↑ 上空から見た大法堤とその周辺

うして1903（明治36）年に、たの工事を始めました。慶次郎の弟、山治は土木技術者でした。齊治は慶次郎力しながら、工事に関する技術や工夫人に教えたと伝えられています。村人も、生活がよくなることを願っていた、この工事に大きな関心と期待を持ちました。

899（明治32）年に、土地の区画えることに重点を置いた耕地整理法がされていましたが、1909（明治4年の法律の改正により、かんがい・排の整備を中心に工事は進められることになりました。また、地主たちが協同で行った耕地整理も、組合をつくって行われうになりました。森藤村の新田開発も、整理組合によって進められました。慶は、その組合長になりました。

事は、ため池づくりと水路工事、そして田づくりとため池からの引き込み水路の2回に分けて、実施されることになりました。

の引き込み口からため池までの水路づは、とても大変な工事でした。水を通



↑ 昔の工事に使われた
たたき石(下)ともっこ(上)



↑ 収穫される梨

すためには、ため池までの途中におよそ50メートルにおよぶ地下水路を掘らなければなりません。今の時代では簡単な工事ですが、当時は全ての道具が手作りで、人の力による掘り抜き作業は、現在とは比べものにならないほど大変な作業でした。

この工事には地元の村人、耕地整理組合員の他に、岡山県からの労働者も加わりました。その中には、工事が終わった後もこの土地に住みついた人もいました。工事現場には、飯場も設けられ、活気がみなぎっていたということです。

慶次郎とひとつになって働いた地域の人々の努力の結果、ついに1912（明治45）年、10年近い歳月をかけてため池が完成しました。当時、「明治池」と呼ばれたこの池は、今は「大法堤」といわれ満々と水をたたえています。

畑を水田に変える

水田づくりとため池からの引き込み水路工事は、ため池完成の前年に開始されました。畑の区画は整理され、水路が取り付けられました。こうして1912（大正元）



↑ ため池のそばに建てられた石碑

(注) 飯場
土木建築工事などの労働者のための宿舎のことをいいます。

年に、15町歩(ヘクター)あまりの水田を完成させることができました。明治初年の森藤村の水田に比べると、新田完成後はおよそ1.5倍に面積が広がり、村人の生活もうるおうようになりました。また、大法堤の水は森藤村だけでなく、さらに下流の地域までひかれ、多くの人々の生活を豊かにしました。

慶次郎は、ため池工事に気力と体力を使い果たし、それが原因で工事完成の3年後に61歳で亡くなったのではないかと、甥にあたる前田裕明さんは昔を思い出すように話されていました。

現在この地域では芝の生産が行われ、水田は減少してきましたが、この土地は慶次郎たちの努力があってこそ今の姿があります。大法堤は水田に水を送るだけでなく、鯉の養魚場としても活躍しています。ため池の赤土によって、ひ鯉の色が良くなり、成長が早いということです。



みややま
宮山神社に建てられている
かんせいきねんひ
完成記念碑



とうはく
東伯町で生産される芝